

近代中日間の社会主義術語の交流に関する一考察
——趙必振訳《近世社会主義》(1903)を中心に

劉孟洋・徐昊

はじめに

近代中国の社会主義・マルクス主義の早期的伝播において、日本経由の役割が大きく、趙必振訳《近世社会主義》(1903)をはじめ、日本から数多くの出版物が翻訳されてきた。趙必振訳(1903)は福井準造著『近世社会主義』(1899)を底本に翻訳されており、近代中国におけるマルクス主義政治経済学の伝播の発端だといわれている¹。この点からして、当訳著は近代中日間の社会主義術語の交流においても重要な役割を果たしてきたものと考えられる。しかし、これまでの関連研究は伝播史、翻訳史を中心に行われており、社会主義術語の生成、借用などに焦点を当てた研究は期待ほど多くはないのである。したがって、本論文では趙必振訳(1903)を言語資料に、底本の福井準造(1899)との術語の対照を通して、術語の借用および創出についての考察を行い、近代中日語彙交流史、社会主義術語の生成史における当訳著の役割について論じようと思う。

一. 対象資料の成立と研究価値

1. 福井準造著『近世社会主義』(1899)

福井準造は神奈川県大住郡小嶺村(現平塚市豊田小嶺)出身であり、その父である福井直吉は同時期の国会開設運動及び自由民権運動の代表的な人物であり、少年期の準造は、父である直吉を通して自由民権運動等の当時の政治状況からある程度思想的影響を受けていた²。福井が「社会主義」について言及したのは1895年(明治28年)に『新潮』に発表した「十九世紀の社会主義及其評論」が最初であり、当文章において「国家」・「国力」という観点から「国家」の存立を脅かす「貧富の懸隔」の拡大を問題視した。

1899年、福井準造は『近世社会主義』という著作を著し、有斐閣出版社にて刊行した。当著作は社会主義思想発展史及び各国の社会主義運動を系統的に紹介した最初の著作であり、合計4編20章からなっており、4編それぞれ「第1期之社会主義」、「第2期之社会主義」、「近時之社会主義」、および「欧米諸国の社会党之現状」について論じている。マルクス主義の学説につい

¹ 張問敏《中国政治経済学史大綱》中共中央党校出版社(1994) p.21、田伏隆・唐代望〈馬克思学説の早期訳介者趙必振〉《求索》第1期(1983) p.118

² 松田隆志「福井準造の思想的原点：日清戦後の「知識人」とナショナリズム・社会主義・農業」『近代日本研究』第14巻(1997) p.8

ては主に第二編の第一章で紹介されている。当著作の第二編第一章「カールマルクス及び其主義」は二節より構成されており、その第一節の「其履歴」ではマルクスの生い立ちを詳しく紹介され、第二節の「其学説」では『資本論』、『共産党宣言』、『経済学之評論』、『英国社会労働之状態』等の主な内容、及び執筆過程が紹介されていた。『近世社会主義』では、また『共産党宣言』の書かれた目的が述べられ、『共産党宣言』の最終の段落が次のように翻訳されていた。

(1) 同盟は其意見及び目的を隠蔽するを望まず、故に吾人は公言す、吾人の目的を貫徹せんが為には、只現社会の組織に向て一大改革を加ふるの要あることを、治者の階級は此共産的革命を戦慄すべし、然れども吾人労働者は只其束縛を脱するの外敢て他意なく、斯くの如にして以て更に一新社会を作為せんとす、全世界の労働者よ、来り以て結合せよ。

福井準造『近世社会主義』(1899)

一方、術語に関しては、本論文ではこれまで中国で出版された社会主義・マルクス主義関連辞典を参考に調査したところ、120もの社会主義関連の術語が当著作で使われていると判明した。形態別に「地主、革命、階級、労働、民主、奴隷、生産、運動」などの二字語術語；「共産党、生産力、資本家、労働者、共産主義、交換価格、労働運動、社会主義、使用価格、労働者組合、社会民主党」などの三字およびそれ以上の多字語術語；「交換の機関、階級の争闘、労働者の階級、賃銀的労働、商業上に於ける恐慌、社会的関係、生産的方法」などの句形式の短語とさまざまなパターンからなるものがみられる。

福井準造(1899)で使われている術語の多くは、小崎弘道「近世社会党ノ原因ヲ論ズ」(1881)、宍戸義知「古今社会党沿革説」(1882)、深井英五『現時之社会主義』(1897)などの既刊の社会主義関連の文章、著作で用例がみられるものであり、80～90年代に創出されてきた術語の多くが福井準造に受け継がれている。一方、福井準造(1899)で新しく用いられ始めたものも少なくはない。例えば、「出版言論の自由、基督教的社會主義、空想的社會主義、労働者の階級、社会的関係、資本家の階級」のような句形式の表現が数多くみられる。従って、社会主義術語の研究において、当著作は非常に価値のある言語資料である。

2. 趙必振訳《近世社会主義》(1903)

趙必振は湖南省常德市の生まれであり、学生時代に常德徳山書院、長沙湘水校経書院に通っており、康有為の影響を受けていた。1900年、湖南「自力軍」蜂起に参加し³、失敗後に清政府の指名手配から逃れるためにマカオ経由で日本へ亡命した⁴。在日中は、梁啓超より創刊された《清議報》、《新民叢報》などの刊行物の編集、校閲作業を担当したほか、「趙振」あるいは「民

³ 自力軍とは中国近代資産階級維新派による武装組織であり、康有為の「保皇派」及び孫中山の革命派との協同により生じている。

⁴ 潘喜顔〈晚晴時期趙必振日書中訳的貢獻〉《史学月刊》第12期(2009)p.131。

史」の名義で清政府の腐敗政治を暴いた文章を発表した。1902年、上海に戻った趙必振は新思想による救国を唱え、社会主義学説を中心とした著作物の翻訳作業に積極的に取り組んだ。その成果の一つが翌年(1903年)に上海広智書局において出版された《近世社会主義》である。

趙必振訳《近世社会主義》(1903)は福井準造『近世社会主義』(1899)を底本に翻訳されたものであり、福井の底本と同様にそれぞれ「第1期之社会主義」、「第2期之社会主義」、「近時之社会主義」、および「欧米諸国の社会党之現状」という4編からなっている。また、底本の第2編第1章では『共産党宣言』最終章の一段落を翻訳した上で引用されていたが、趙必振の訳本ではその段落を次のように翻訳されている。

(2) 同盟者望无隐蔽其意见的目的, 宣布吾人之公言, 以贯彻吾人之目的。惟向现社会之组织, 而加一大改革, 去治者之阶级, 因此共产的革命而自警。然吾人之劳动者, 于脱其束缚之外, 不敢别有他望, 不过结合全世界之劳动而成一新社会耳。趙必振訳《近世社会主義》(1903)

趙必振訳(1903)は近代中国において初めて社会主義思想・マルクス主義学説について体系的に紹介された訳著であり、術語の使用上も福井準造の底本(1899)から大きな影響を受けている。例えば、前述の『共産党宣言』最終章の訳文で使用された“社会之组织”、“改革”、“治者之阶级”、“共产的革命”、“劳动者”、“劳动”等の術語はいずれも底本から借用されたものである。しかし、これまで趙必振訳(1903)をめぐる術語の研究はそれほど多くはなかった。鮮明(2014、2015)では“价格”、“社会主义”、“无政府主义”などの個別術語の翻訳を対象とした研究が行われたが、当訳著で使われている術語の全般について取り上げられていなかった。従って、本論文では趙必振訳(1903)の術語全般に焦点を当て、福井準造の底本と対照しながら、近代中日間における社会主義術語の借用と創出を探ろうと試みる。

二. 趙必振訳(1903)における社会主義術語の借用

本論文では宮川実編『マルクス経済学辞典』(1965)、久留間鮫造編『資本論辞典』(1966)、金炳華編《馬克思主義哲学大辞典》(2003)、徐光春編《馬克思主義大辞典》(2018)などの関連の辞書を参考に、趙必振訳(1903)から合計120語もの術語を抽出した。また、本論文の調査によれば、福井準造の底本(1899)から直接借用されたものは100語以上も達していると判明した。なお、底本(1899)の術語との対訳関係を視野に入れた上で、趙必振訳(1903)の術語を形態別に二字語、三字語、四字語、五字語と句形式の短語を整理すると、表1の通りとなる。

表1 趙必振訳(1903)における社会主義術語の一覧表

	二字語	三字語	四字語	五字語	句形式	合計
底本と一致する術語	60	16	25	4	7	112
底本と異なる術語	0	0	0	0	8	8
合計	60	16	25	4	15	120

趙必振訳 (1903) で用いられている術語全般は表 1 の示されたように、二字語、三字語、四字語、五字語と句形式の短語からなっている。二字語から五字語まではいずれも底本と一致しているが、句形式からなる短語は、半数以上が底本と異なっている。したがって、本節では底本と一致している語形態のものを中心に考察を加える。

2.1 二字語の術語

趙必振訳 (1903) で使われている社会主義関連の術語のうち、底本と一致している二字語の術語は合計 60 語がある。この 60 語を出身別で整理すると、表 2 の通りである。

表 2 趙必振訳 (1903) における二字語の術語

	術語
漢籍に出典のある新義語	財産 道德 地主 独占 法律 分配 革命 工业 关系 贵族 国家 国民 货币 机械 交换 教育 阶级 经济 竞争 劳动 劳民 利益 掠夺 矛盾 民主 农夫 农民 农业 奴隶 平等 平民 人口 人民 商业 社会 生产 市场 市民 思想 物质 消费 运动 真理 争斗 政权 政治 专制 资本 自由 宗教
中国製新造語	罢工 恐慌
和製新造語	地代 分业 工场 价格 赁银 目的 原料 哲学

社会主義・マルクス主義関連の文献で頻繁に使われている二字語に関しては、朱京偉 (2007) の研究によれば、術語というよりは基本概念を表す一般語として機能しているものである⁵。これらの術語は語源の面から「漢籍に出典のある新義語」、「中国製新造語」、「和製新造語」の三種類に分けられ、全般的に「漢籍に出典のある新義語」が最多数を占めている。

漢籍に出典のある新義語とは、社会主義・マルクス主義的ニュアンスが賦与されたことにより、漢籍で用いられている本来の意味から変化が生じたものである。例えば、“斗争”は漢籍では「闘う」という意味として使われていたが、趙必振訳 (1903) では「社会運動や労働運動などで、要求を通すために争う」という社会主義的なニュアンスで用いられている。中国製新造語に関しては 19 世紀の在華宣教師より編纂された英華辞書において初期用例がみられたものである。例えば“罢工”はウィリアムズ編《英華韻府歴階》(1944)において“Dismissal”の訳語として、“恐慌”はロブシャイド編《英華字典》(1866-69)において“Afraid”の訳語としてすでに収録されていた。和製新造語に関しては、いずれも明治以降日本で創出された新漢語である。

これらの二字語が社会主義関連の術語として用いられはじめた経緯に関しては、日本の出版物による影響がきわめて大きいと考えられる。

具体的な例を挙げると、“交换”という語は漢籍では「物と物との引換」、「互のやりとり」

⁵ 朱京偉〈馬克思主義文献の早期日訳及其訳詞〉《語義的文化変遷》武汉大学出版社 (2007) p.411。

という意味で用いられていた。

(3) 其虞侯军职掌准初发交換。 唐《通典·兵十》

この意味の用法は明治初期の日本語資料にもみられ、中村正直はその訳書の『西国立志編』で、「互いのやりとり」という意味の「交換」を使っていた。

(4) 学問の通用銀を、その身に帯び、要用の事あらばこれと交換すべし。

中村正直訳『西国立志編』一一・一二 (1870-71)

明治初期の日本語では、「交換」が上記のような一般的な用法のほか、経済学的な用法もみられた。例えば、大学南校より刊行された彼理の『経済原論』において、「交換」は“Exchange”の訳語に値するものとして、「人と人で行われる労働生産物のやりとり」というニュアンスで用いられていた。

(5) 将ニ交換セントスル品物ヲ先此物品(貨幣ヲ云フ)ニ換へ、然ル後、之ヲ以テ入、他ノ求
需スル品物ニ換ル。 彼理(アルザル・レザム・ペーリー)『経済原論』巻之7 (1870)

『経済原論』の新しい概念を表す「交換」がのちに日本の社会主義関連の文献に受け継がれ、福井準造の『近世社会主義』にも同じような用法が使われていた。

(6) 斯の如く価格を分類して使用、交換の二種となし、此両価格の区別として能く判然せしめ
には、資本家が自己の富を造らんが為に如何に労働者を利用せしかを知るに難からず。

福井準造『近世社会主義』(1899)

20世紀の初頭、社会主義関連の日本語文献が中国語に翻訳されはじめ、社会主義関連の術語も中国語に入ってきたが、趙必振訳(1903)では、底本(1899)から新しい概念を表す「交換」をそのまま受け入れていた。

(7) 价格之分类，即以使用交換之二种，此两价格之区别，判然而不能淆，彼资本家，但求自己
之富，但利用劳动者，而不知其难。 趙必振訳《近世社会主義》(1903)

全体的にみて、趙必振訳(1903)で用いられている二字語の術語は漢籍に出典のある新義語、中国製新造語、和製新漢語の3種類に分けられているが、これらの二字語の術語は全て底本(1899)から直接借用されたものである。

2.2 多字語の術語

趙必振訳(1903)で使われている社会主義関連の術語に、二字以上のものを整理すると下記のとおりである。

三字語の術語

被雇者	共产党	劳动党	劳动力	劳动者	劳民党	生产力	生产产品
生产物	手工业	无政府	殖民地	制造所	资本家	资本主	自由民

四字語の術語

个人主义	共产党员	共产主义	交换价格	劳动时间	劳动运动	劳动组合
民主主义	奴隶制度	社会主义	生产机关	使用价格	私有财产	同盟罢工
同业组合	土地资本	小资本家	信用制度	信用组合	余剩价格	职工组合
资本集中	自然价格	自由竞争	自由主义			

五字語の術語

劳动者组合 社会民主党 无政府主义 自由劳动者

研究上の便宜のため、本論文では、これらの術語をまとめて多字語と称する。

語構成の面からみて、三字語の術語は“劳动者”、“无政府”のように、「語基+接辞」、「接辞+語基」という形式で構成されており、その語基にあたるものはほとんど基本概念を表す二字語である。

四字語の術語に関しては、基本的に“劳动运动”、“社会主义”のような二字の語基同士の組み合わせにより構成されているが、このほか、“共产党+員”、“小+资本家”などのような「三字語+接辞」、「接辞+三字語」という組み合わせからなるものもみられる。

五字語の術語に関しては、“劳动者+组合”、“社会+民主党”のように、「三字語+二字語」、「二字語+三字語」の組み合わせによって構成されているものが普通である。

これらの多字語の術語はいずれも漢籍に出典がみられず、近代日本語において創出されたものであるが、中には、趙必振訳（1903）以前に、すでに中国語に用いられてきたものと、趙必振訳（1903）を以て初めて用いられてきたものに分けられる。

趙必振訳（1903）が出版される以前に用いられてきた術語は、本論文の調査によれば、次のものが挙げられる。

共产党 劳动党 劳动者 劳民党 生产力 生产物 手工业 无政府 殖民地 制造所
资本家 资本主 个人主义 共产党员 共产主义 劳动时间 民主主义 社会主义 生产
机关 私有财产 职工组合 自由竞争 自由主义

たとえば、“自由主义”は「個人の自由を尊重し、これに対する国家の干渉を排除しようとする政治思想」という概念を表し、“Liberalism”の訳語に値するものである。本論文の調査によれば、この語の初期用例は 19 世紀 80 年代の日本の文献にみられ、『大阪朝日新聞（朝刊）』554 号で掲載された文章に以下のような用例がみられた。

(8) 国会期成有志公会の会議は議論紛出し、一は国会を目的とするは適当ならず、自由主義の政党を組織するに改めんと主張し、又た一は国会期成の同盟を守りて猶ほ益々結合を拡張せんとするものありしか……。 『大阪朝日新聞(朝刊)』554号(1880)

後に福井準造(1899)などの社会主義関連の著作でも「自由主義」という術語が受け継がれていた。

(9) 社会は基督教の經典と真理とを労働者に教やるを要す。是れ労働者のために真正なる教育にして、自由主義の理論が、自助を本として労働者の教育を顧みず。

福井準造『近世社会主義』(1899)

中国語で“自由主义”が用いられ始めたのは19世紀の末頃であり、本論文の調査によれば、《清議報》に掲載された文章に初期用例がみられた。

(10) 格兰斯顿则反是，不专执一主义，不固守一政见，故初时持守旧主义，后乃转而为自由主义。 『清議報』第25冊(1899)

《清議報》は日本亡命中の梁啓超が横浜で創刊した機関誌であり、前述の“自由主义”の用例は日本語からの影響を受けたものと考えられる。

また、福井準造(1899)を底本にした趙必振訳(1903)でも、この語を底本から底本から直接借用してきた。

(11) 教会者，以基督教之經典与真理，而教劳动者，是为劳动者真正之教育，如彼自由主义之议论，以自助为本。 趙必振訳《近世社会主義》(1903)

一方、趙必振訳(1903)を以て初めて用いられてきた術語に関しては、本論文の調査によれば、次のものが挙げられる。

被雇者 劳动力 生产品 自由民 交换价格 劳动运动 劳动组合 奴隶制度 使用价格
同盟罢工 同业组合 土地资本 信用制度 信用组合 余剩价格 资本集中 自然价格
劳动者组合 社会民主党 无政府主义 自由劳动者

たとえば、“交换价格”は古典派経済学及びマルクス経済学の概念であり、「ある商品の使用価値がその他の使用価値と交換される場合の比率」を指している。本論文の調査によれば、日本では19世紀90年代頃からこの概念が翻訳され始め、深井英五著『現時之社会主義』(1893)では「交換上の価格」という短語の形式で充てていたが、田島錦治著『日本現時之社会問題』(1897)では四字語の「交換価格」と訳されていた。

(12) 交換上の価格は価格自身に非ずして、価格が現時の社会に於て顕現する形式なり。

深井英五『現時之社会主義』(1893)

(13) 語を換へて之れを言へば交換価格にのみ存在して有用価格には存在せざる一元素のあや疑無し。

田島錦治『日本現時之社会問題』(1897)

田島錦治(1897)で使われた「交換価格」の四字語は福井準造(1899)にも受け継がれ、さらには福井準造(1899)が趙必振の手に漢訳されたことにより、中国語においても“交換价格”が用いられはじめた。

(14) マルクスの価格論は価格の分離に始まる。彼は価格と分離して之に「しよう価格」及び「交換価格」の二種ありとせり。

福井準造『近世社会主義』(1899)

(15) マクス之“价格论”以价格之分离为始，彼论价格分离之道，分“使用价格”及“交换价格”二种。

趙必振訳《近世社会主義》(1903)

全般的にみると、趙必振訳(1903)で用いられている多字語の術語は、いずれも福井準造の底本(1899)から直接借用されていたが、その中の一部は、当訳著を通して中国語で初めて用いられたものである。

三. 趙必振訳(1903)における術語の改訳

趙必振訳(1903)で用いられている術語のうち、前述のように、底本(1899)と一致していないものもあるが、これらの底本の術語から改訳されたものは主に句形式の短語で表現されている。

趙必振訳(1903)で用いられている句形式の短語は、本論文の調査により、次の15語があると確認した。

①福井準造(1899)と一致するもの：

基督教的社会主义 空想的社会主义 累进的租税 赁银的劳动 社会的关系
生产的方法 政治的运动

②福井準造(1899)と不一致のもの(括弧内は底本の術語)：

出版言论之自由(出版言論の自由) 交換之机关(交換の機関)
阶级之争斗(階級の争闘) 劳动者之革命(労働者の革命)
劳动者之阶级(労働者の階級) 资本家之阶级(資本家の階級)
治者之阶级(治者の階級) 商业上恐慌(商業上に於ける恐慌)

底本と一致している短語に関しては、全て「O+的+O」の形式で構成されている。例えば、「空想的社会主义」が底本(1899)で使われおり、趙必振訳(1903)ではそれをそのまま受け

入っていた。

- (16) 加ふるに一時流行しラーエンの空想的社会主義再び頭を上げ、千八百四十五年より同八十五年に至る迄各同業者の団体は政治上の事件を視て、殆んど之を度外に置けり。

福井準造『近世社会主義』(1899)

- (17) 拉野之空想的社会主义，一时流，其势再炽，自千八百四十五年至八十五年，其视各同業者之团体，与政治上之事件，殆如置之度外。

趙必振訳《近世社会主義》(1903)

近代日本語において、接辞の「～的」は「それに似た性質を持つ」、「何かに関する」という意味が賦与され、抽象的な事柄を表す漢語について用いられることが多く、とくに社会主義関連の資料に多用されていた。趙必振は福井準造の『近世社会主義』(1899)を翻訳する際、底本からこの短句訳をそのまま受け継いだのである。

一方、底本と一致していない短語は、主に底本の「○+の+○」を中国語訳したものである。福井準造の『近世社会主義』では、一部の社会主義・マルクス主義の概念が、まだ術語化されておらず、句形式の短語訳にされている。趙必振訳(1903)では、底本の句形式の短語をベースに、それを“○+之+○”という形式に改訳されていた。

具体例として“阶级之争斗”、“劳动者之阶级”の2語を挙げたところ、以下の通りとなる。

- (18) 同盟の目的は平民(即ち労働者)の束縛者たる市民(資本主)を平夷し、階級の争闘を基礎とせる旧社会を全滅し、階級制と財産私有制とを撤去して以て一新社会を組織するにあり……。

福井準造『近世社会主義』(1899)

- (19) 同盟之目的，以平民(即劳动者)之束縛者，与市民(即资本主)而平夷，全灭阶级之争斗，与旧社会之基础，撤去阶级制与私有财产制，以组织一新社会……。

趙必振訳《近世社会主義》(1903)

- (20) 社会主義の宣言書を發して盛んに同志を募り、社会を上下二段の階級に區別し、資本家の階級を打破せんが為に、労働者の階級に勢援すべしと揚言せり。

福井準造『近世社会主義』(1899)

- (21) 至千八百九十一年，米拉及希耶亚，又兴新劳民党，发社会主义之宣言书，盛募同志，区别社会上下二段之阶级，以打破资本家之阶级，而为劳动者之阶级之势援。

趙必振訳《近世社会主義》(1903)

社会主義・マルクス主義術語の創出は、まず社会主義・マルクス主義理論への理解に関わっている。福井準造(1899)では、社会主義理論に対する理解の限界により、一部の概念は術語化することができず、句形式の短語訳にしていた。その影響を受けていた趙必振訳(1903)では、語形式の術語の創出より、対応する句形式の表現に翻訳していた。

同じような方法で改訳されたものはほかに“商業上恐慌”がある。底本では「商業上に於け

る恐慌」という句形式の短語訳をしていたが、趙必振訳（1903）では、それを踏まえて“O＋上＋O”という形式を取っていた。

(22) 是れ即ち商業上に於ける恐慌發生の端緒にして依りて以て経済社会の紊乱を惹起するに至る。
福井準造『近世社会主義』（1899）

(23) 是即商业上恐慌发生之端绪，而经济社会上之发生。趙必振訳《近世社会主義》（1903）

趙必振訳（1903）における句形式の改訳は底本からの影響が大きく、しばらく社会主義・マルクス主義の新しい概念を表すのに活用されていた。しかし、概念から術語化への転換は実現されておらず、現代中国語ではほとんど用いられなくなった。

結び

趙必振訳《近世社会主義》（1903）は社会主義とその理論を体系的に紹介した訳著として、社会主義・マルクス主義の基本理論が中国での早期伝播に大きな役割を果たしていた。同時に、福井準造（1899）を底本に翻訳されたものなので、社会主義・マルクス主義術語の翻訳に底本から多大な影響を受けており、とくに語形式の術語はいずれも底本からそのまま受け継いでいる。これらの術語はのちの五四運動、中国共産党の成立という時代の流れを経て、現代中国語になお使われているものはつぎのものがある。

共产党 劳动力 生产力 生产物 手工业 无政府 殖民地 自由民 个人主义 共产党员 共产主义 民主主义 私有财产 土地资本 资本集中 自由竞争 自由主义 社会民主党 无政府主义 自由劳动者

句形式の短語はみな底本から直接借用されたもの、あるいは底本の原語表現をベースに改訳されたものである。これらの短語訳は現代中国語ではすでに術語化されていたが、当時では社会主義・マルクス主義の概念を訳出するには重要な方法だと考えられる。

社会主義・マルクス主義の概念が中国での早期創出には、近代中日間の術語の交流が大きな役割を果たしていたが、趙必振訳《近世社会主義》（1903）はこの交流の歴史を忠実に反映されていたと考えられる。

参考文献

田伏隆・唐代望<马克思学说的早期译介者赵必振>《求索》第1期（1983）

张问敏《中国政治经济学史大纲》（1994）中共中央党校出版社

松田隆志「福井準造の思想的原点：日清戦後の「知識人」とナショナリズム・社会主義・農業」『近代日本研究』第14巻（1997）

朱京伟<马克思主义文献的早期日译及其译词>《语义的文化变迁》武汉大学出版社（2007）

潘喜颜<晚晴时期赵必振日书中译的贡献>《史学月刊》第12期(2009)

鲜明<《近世社会主义》对晚清国人译介社会主义学说的影响>《社会科学论坛》第4期(2014)

鲜明<《近世社会主义》对马克思主义学说译介的贡献>《社会科学论坛》第4期(2015)

辞書類

豊田四郎編『マルクス経済学辞典』(1956) 青木書店

宮川実編『マルクス経済学辞典』(1965) 青木書店

久留間鮫造編『資本論辞典』(1966) 青木書店

奚広庆主编《西方马克思主义辞典》(1992) 中国经济出版社

卢之超主编《马克思主义大辞典》(1993) 中国和平出版社

金炳华主编《马克思主义哲学大辞典》(2003) 上海辞书出版社

徐光春主编《马克思主义大辞典》(2018) 崇文书局

本論文為 2020 年度教育部人文社会科学研究青年基金項目“《共产党宣言》在中日两国早期訳介過程中馬克思主義術語的訳出、共享与演變研究”(項目批准号:20YJC740035);中央高校基本科研業務費資助(Supported by “the Fundamental Research Funds for the Central Universities”)“近代中日《共产党宣言》伝播史視闕下馬克思主義術語の生成、互動与演變研究”(項目批准号:DUT19RC(3)024)的階段性研究成果。項目主持人:劉孟洋

執筆者: 劉孟洋(大連理工大学 外国語学院)/徐昊(北京外国語大学 日本学研究中心)

【新刊紹介】

(一) 《西士与近代中国：罗伯聃研究论集》

目次

序文	沈國威
羅伯聃對漢語語言學的貢獻	內田慶市
關於羅伯聃的「新」史料	蘇精
羅伯聃與〈虎門條約〉的翻譯	王宏志
《王嬌鸞百年長恨》的德、英譯本及其譯者	李雪濤
《七奇圖說》與清人視野中的“天下七奇”	鄒振環
代後記：羅伯聃事蹟述略	沈國威
正音撮要 (Chinese Speaker, 1846)	
執筆者一覽	



本书是关于罗伯聃 (Robert Thom) 的研究论文集，由罗伯聃研究的著名学者执笔。罗伯聃是 1834 年来华的英国人，曾将伊索寓言译成汉语，还有数种汉语学习的书籍。罗氏在鸦片战争期间为英军做翻译，参与南京条约的谈判，是英国驻宁波的首任领事。本书从翻译史、汉英语言学习史外交史等角度，运用第一手宝贵资料，对罗伯聃进行了全视角的考察。卷末附《正音撮要》全文影印。关西大学出版部，2020 年，精装，305 页，4600 円。

(二) 《新语往还：中日近代语言交涉史》，社会科学文献出版社，2020 年，600 页，118 元。书影见封 4。本书是《近代中日词汇交流研究——汉字新词的创制、容受与共享》(中华书局，2010) 的改订新版。除了误植和叙述错误的订正外，为了反映学界的最新动向，还整理充实了十年以来的参考文献，并增写了“终章”。在“终章”里，就汉语词汇体系近代重构，做了深入的讨论。

【接封 3】 關於 張玉堂 (Stanley Yip 文)

張張玉堂還在九龍建造：1859 年出資建「惜字亭」(現代祇有閩湘一帶才有保留)、捐辦猪屎寮和維護「龍津義學」。龍津亭的「龍津」二字，現在樂善堂後門。張駐守九龍寨城共十二年之久。1856 年，港督深怕九龍寨成為抗英基地，要求張玉堂交出抗英分子不果，於是派遣二百英軍渡港，活捉張玉堂至港島加以「警誡」。雖為行伍出身，但好文書，自称「翰墨將軍」：

1. 能詩、擅長蘭竹詩，有《公餘閒咏》集。
2. 善書，尤擅拳書和指書，書寫方法是棉花包裹拳頭或指頭書寫，字跡蒼勁瀟灑。現香港和澳門仍有其書法。
3. 香港書法有：灣仔石水渠街的「玉虛宮」；九龍城侯王廟的「治荷幘幪」匾額；九龍城樂善堂學校的石聯；以及原置於九龍寨城天后廟，現已遷置九龍寨城公園舊衙署的拳書「壽」字及「墨緣」石刻，和指書聯句「欲種福田流世澤，須憑心地積陰功。」；新界沙田曾大屋內的「祥徵萬福」石額，下款署名「武功將軍張玉堂書」等。
4. 澳門書法有：媽閣廟「海鏡」、「名巖」，和《登澳門海覺寺》詩刻。
5. 廣東中山書法有：香山鐵城(今中山市石岐)西山寺所書之行書門聯「紅棉舊蔭，福地重光」。

值得一題的是，張玉堂不但精於詩書，也通曉英語，曾協理清廷處理割讓九龍半島的事務。1866 年德國傳教士羅存德的《英華字典》出版，是香港最早的雙語字典，有請張玉堂寫中文序。羅存德為甚麼經常跑九龍城寨，還不清楚。同治五年(1866)75 歲時告老歸里。